循環器内科

（スタッフ）

部長　　：村松　浩平
副部長　　：古閑　靖章
副部長　　：新富　將央（４月から）
主任医師　：新富　將央（３月まで）
　　：秋山　雄介（３月まで）
医師　　：倉岡　沙耶菜（４月から）
嘱託医　　：倉岡　沙耶菜（３月まで）
専攻医　　：岸田　峻
　　：馬場　晶子
　　：大鶴　亘（４月から）
　　：德本　真弘（４月から）
　　：谷口　弦太郎（４月から）
　　：加藤　あさひ（３月まで）
　　：藤田　理志（３月まで）

前年度からの村松浩平・古閑靖章・新富將央・倉岡沙耶菜・岸田峻医師に加え、大鶴亘・德本真弘・谷口弦太郎医師が赴任し、当院プログラムの馬場晶子医師が勤務し、専攻医が６名と若いチームとなりました。初期研修は、青木希実・相良早紀・田中真輝・濵田奈央子・佐藤実歩・大野哲・野見山恭平・福田貴仁・吉橋誠人・牧睦実・大庭直也・甲斐大喜・岩本香里・澤田輝が研修しました。外来業務は従来の固定性から、首藤久恵・筒井久恵を中心としたブロック制となりました。病棟業務は瑞木恵美看護師長と大森久美・安藤勝美の両副看護師長をはじめとする看護師とともに診療にあたりました。心臓カテーテル検査（緊急カテも含め）では、放射線技師、看護師、生理検査技師、臨床工学技士が常に参加しています。

毎週の循内合同カンファレンスには、循環器内科医師全員と循環器内科に関係する全てのコメディカル（病棟看護師、外来看護師、放射線科看護師、放射線技師、生理検査技師、薬剤師、医事・相談課職員、ドクタークラーク、臨床工学技士）が参加しています。また、毎週、心臓血管外科ともハートチームカンファレンスを行い、毎朝の救命救急センターのカンファレンスには、循環器内科医師も参加しています。

「心不全パンデミック」と言われ、特に高齢者の心不全患者の爆発的な増加が重大な問題となっています。慢性心不全看護認定看護師（県内２人）の佐藤寛子看護師が週２回、心不全看護外来を行い、毎週、多職種心不全カンファレンス（医師、病棟・外来看護師、緩和ケア看護師、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、必要に応じて心理療法士）を行っています。

（診療実績）

新型コロナウイルス感染症の影響が続いておりますが、心カテ件数（872 件）・PCI 件数（404 件）でした（図１）。PCI の中で、ELCA は 45 件、ROTA は 28 件、DCA は５件、Diamond Back は９件でした。EVT（末梢血管カテーテル治療）は 22 件でした。ペースメーカーは、新規 37 件、電池交換１件、リードレスペースメーカーは１件、CRT-P（両室ペースメーカー）は２件、CRT-D（植え込み型除細動器付き両室ペースメーカー）は２件でした。IABP は 24 件、PCPS は 14 件でした。

ABL（カテーテルアブレーション）は、大分大学循環器内科のバックアップのもとに 45 件に増加しました。

紹介率は 105％、逆紹介率は年々増加して 462％でした。地域医療・病診連携に、微力ではありますが、貢献できるようになって来ました（図２）。

（今後の方向性）

従来、重症急患の初期治療と蘇生患者の脳低体温療法も含めた入院加療を担当してくれる救命救急センターのスタッフと、困難な手術を断ることなく引き受けてくれる心臓血管外科のスタッフのバックアップ、そして、総合力のある循環器センターこそが、循環器内科の最大の強みとなっています。

循環器センター日当直とホットラインで、24 時間 365 日体制で、各医療機関・救急隊からの循環器救急依頼に対応しています。

心筋梗塞・心不全の急性治療のみならず、古閑医師が中心となって、冠疾患のハイリスクの患者に対して積極的なスクリーニングを行い、急性冠症候群の発症前に治療介入出来るように、院内・病診連携のシステム構築に努めています。

大分県心不全ケアカンファレンスの取り組みにも積極的に参加し、これからも心不全パンデミックに対して、多職種で対応していきたいと思います。

今後、病診連携をよりスムーズに行い、外来通院を開業医の先生方にお願いするとともに、急変・緊急患者の対応、そして、冠動脈イベント発症前に治療介入できるよう、当科でも併診の体制を続けていきます。

（文責：村松浩平）

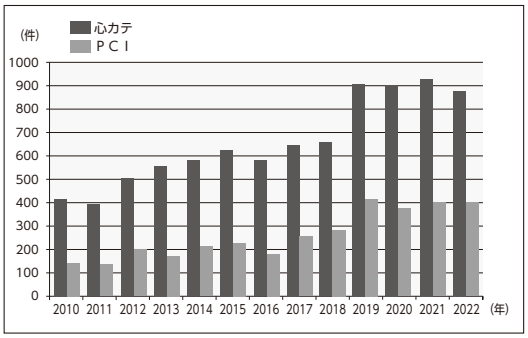

図１　心カテ・PCI 件数の推移

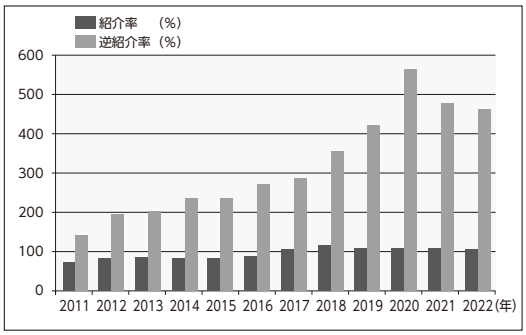

図２　紹介率・逆紹介率の推移